

時をこえて 挑み続ける

エネルギー事業もチャレンジでした。

セキショウグループの祖業であるエネルギー事業は、創業者関彰（せきあきら）が勤務していた吉田商店から灯油や食料油の販売事業を継承して始まったと言われています。しかし、その後の事業展開を見れば、単に事業を引き継いだのでは無く、時代の変化を察知し、新たなエリアやビジネスモデルへ果敢にチャレンジしていたのです。

明治41年（1908年）の創業から間もない大正4年（1915年）、茨城県の自動車保有台数はわずか1台※という時代。関彰は、近代化する時代の変化を敏感に感じとり「漁船の動力がエンジンに代わる。これからは石油の時代だ」と、創業の地である下館（筑西市）から150キロ離れた福島県四ツ倉（いわき市）に支店を開設し、船舶向けの燃料販売に着手するという果敢な行動力で開拓への道を邁進しました。

※日本帝国第三十四統計年鑑（1915）より

しかし、道のりは平坦ではありませんでした。すでに地元には長年燃料を供給してきた油商があり、一般家庭の灯油から炭鉱漁船に至るまで、油を必要とするあらゆる場所でシェアを独占していたのです。特に平地区では、石油販売の看板を掲げることは許されませんでした。関彰は昭和3年（1928年）に金庫の特約店※2として平支店を設置。金庫、コンロ、ストーブに加え、非公式で石油の販売を行う日々を過ごしました。

※2 東京松浦金庫と特約契約を締結（社内資料より）

商売が思うように進まない中、一つの出来事が流れを変えました。ある日、船主たちがやって来て「油が不足して船を出せず困っている」と訴えるのです。しかし、手持ちの油も不足気味な上、仕入れ先にも在庫がない状況でした。そこで関彰は300キロ以上も離れた油の産地である秋田や新潟に自ら出向き油をかき集め、船主たちの要望に応えたのです。このとき、船主たちから得た信用は絶大であり、この出来事を経てセキショウは事業を拡大し、「いわき七浜」と呼ばれる海岸線に確固たる販売網を築きました。

このエピソードで語られる創業者の「チャレンジ精神」は、グループ内に代々受け継がれています。経済成長著しい昭和の時代にはサービステーション網の拡大、ビジネス事業、モビリティ事業への参入、平成に入り介護事業、海外事業をスタート。そして現在はカーボンニュートラル、スポーツビジネス分野での新規事業に取り組んでいます。

創業117年、そして福島県進出110年を迎えるにあたり、創業の時代に思いを馳せ、これまでセキショウグループを支えてくださった「たくさんのご縁」に感謝するとともに、創業から続く「チャレンジ精神」を胸に刻み、次世代にしっかりと引継げるようグループをあげて取り組んでまいります。

関彰商事株式会社は、
創業117周年、福島県進出110周年を迎えます。

110th
117
Anniversary



大正4年に開設した四倉支店(写真は昭和初期)

おかげさまで創業117周年を迎えます。日頃のご愛顧に心より感謝申し上げます。

